『東京大学言語学論集』**44** (2022.10) 61-73

翻訳における「意味空間」に関する考察

池辺早良
ikebe-sara713@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

キーワード：翻訳研究　意味空間　等価　しっくりくる言葉選び

要旨

山本 (2020) は、翻訳研究における「直訳」と「意訳」の対立による従来の枠組みを批判し、翻訳とは筆者が思い描いた「意味空間」を再現し、起点テクストの意味作用を目標言語で創造する行為であるべきだと主張している。本稿では「意味空間」について、Jakobson (1959/2004) や Nida (1964, 1969) が提唱する「等価 equivalence」の概念との比較を通じて、詳細な検討を加える。また、古田 (2016) の〈しっくりくる言葉〉を選ぶ行為と「意味空間」の関わりについても検討する。「意味空間」を想定することにより、意味か形式かという対立から逃れ、より包括的な翻訳理論への展望を考えたい。

1. はじめに：翻訳とは何か

山本 (2020: 188) は翻訳を以下のように定義している。

(1)　翻訳とは、言語レベルの置き換えではなく、コミュニケーションのレベルの転換である。そして、コミュニケーションとは作者と読者が「世界」を共有する「出来事」である。[…] 原作の作者が脳中に描き、伝えようとしている「世界」についての情報やアイデアに直接アクセスし、別の言語で再現するのが翻訳という行為です。すなわち、作者が執筆する前に「世界」についての情報・アイデアが存在し、次いでそれが作者独自の言語によって表現されていますが、その言語表現から「世界」を頭の中に再構築し、それを別の言語で忠実に表現するのが本来の翻訳という行為です。

山本の言う「言語レベルの置き換え」とは、例えば F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* の冒頭部分である (2a) を機械翻訳によって日本語に翻訳した (2b) のような例が考えられる。(2a) の起点テクスト[1]である *The Great Gatsby* は Nick Carraway の一人称限定視点 (first-person limited) で過去を振り返る語り口で構成されている。(2a)の後続文脈で大学時代の描写 (Fitzgerald, 2011/1925: 3) があることから、“my younger and more vulnerable years” とは語り手である Nick の大学生時代以前の話をしていることが理解できる。そのため、“vulnerable” は〈 (感情などが)

[1] 本稿では、翻訳元である原文を起点テクスト (source text)、翻訳された訳文を目標テクスト (target text) と呼ぶ。また、起点テクストの言語を起点言語 (source language)、目標テクストの言語を目標言語 (target language) とする。

傷つきやすい〉という意味で使用されており、“years” は〈(人生のある特定の) 期間・時期〉という意味で使用されていることが理解できる。 (2b) の翻訳では、“vulnerable” と “years” がそれぞれ「脆弱」と「年」などの逐語的に対応する日本語に置き換えられているが、「脆弱な年」という表現から〈感情が傷つきやすかった時期〉という意味を適切に理解することは困難[2]である。

(2) a. IN MY YOUNGER and more vulnerable years my father gave me some advice that I've been turning over in my mind ever since. (Fitzgerald, 2011/1925: 3)
b. 私の若くてより脆弱な年に、私の父は私にそれ以来ずっと私の心の中でひっくり返ってきたいくつかのアドバイスをくれました。 (Google 翻訳[3])
c. むかし、若くて多感だった私に、父がアドバイスをくれた。それ以来、それはずっと私の心の中にある。 (山本 2020: 96)

山本 (2020: 102-103) の言葉を借りれば、(2a) のような翻訳は「語に語が（用法まで含めて）対応し、それによって、異なる言語でも同じ意味が生み出されるという素朴な言語観」に基づいていると批判できる。例えば、“vulnerable” が起点テクスト内で表す〈傷つきやすい〉という意味の伝達を「脆弱」という語の置き換えによって実現しようとする試みは、そうした言語観に基づいている可能性が高い。それに対し、山本による試訳 (2c) には、起点テクストには逐語的に直接対応する語がない「むかし」等の記述があり、起点テクストと目標テクストは逐語的な一対一対応の関係にあるという言語観では説明できない翻訳になっている。

つまり、山本が (1) で述べているような「コミュニケーションレベルの転換」によって達成された翻訳とは、(2c) に準ずるような翻訳である。これは「頭の中[4]に存在している考え・意味・イメージ」 (山本 2020: 199) を別の言語で再現したものである (山本 2020: 188-189) 。このような「言語に先行する意味」や (1) で述べた「世界」のことを、山本は「意味空間」と名付けた (山本 2020: 138) 。

(3) 原作の文章から、「意味空間」[5]に含まれている考えやことばを引きずりだし、翻訳先の言語・文化の文法に則って情報を選択し、明示化し、さらに文脈に即して適切な (英語

[2] 仮に文脈情報等によって「脆弱な年」が適切に理解された場合でも、起点テクストにおいて意図的に難解な表現が用いられていない限り、理解されにくい表現を用いた翻訳は避けられるべきである。
[3] Retrieved on March 11th, 2022 from: https://translate.google.co.jp/?hl=ja&tab=wT&sl=en&tl=ja&text=In%20my%20younger%20and%20more%20vulnerable%20years%20my%20father%20gave%20me%20some%20advice%20that%20I%27ve%20been%20turning%20over%20in%20my%20mind%20ever%20since.&op=translate
[4] 「頭の中」とは、起点テクストの筆者の頭の中である。
[5] 山本 (2020:199) によれば「意味空間」とは「抽象的な概念ではなく、文脈をも含んだ多分に視覚的なもの」である。

でいえば relevant な) 文体的特徴を選び取り、必要なら文化的調整を加えながら別の言語で再現する、それがいわゆる翻訳[6]です。

(山本 2020: 144)

このように、山本が提案する「意味空間」は翻訳研究において大きな示唆を持つものであると考える。しかし、その内実についての詳細な分析は行われていない。そこで本稿では、翻訳研究における主要な研究である Jakobson (1959/2004) と Nida (1964, 1969) の「等価 equivalence」の概念を「意味空間」と比較し、「意味空間」の有用性の検討と考察を行う。分析対象には、「文体そのものに意味があり、形そのものがテクストの意味と価値と不可分」である文学テクスト (山本 2020: 88) に対象を絞る。例えば、(4a) は「夜」「静か」「寒い」という情景描写の情報を単に伝達するだけでなく、詩的な文体そのものが『雪国』という作品を特徴付けている。作品そのもののアイデンティティーでもあるこのような文体的特徴は、目標テクストでも再現されなければならない。

(4) a. 村は寒気の底へ寝静まっていた。 (川端 1948/2006: 78)
b. The village lay quiet under the cold sky. (Seidensticker, 1970/2011: 53)

しかし、起点テクストの形式と意味をすべて保持したまま目標言語に完全に再現することは不可能である。本稿では、「意味空間」がこのような翻訳における困難を乗り越えるために有効な概念であることを示すことを目指す。また、古田 (2018) の〈しっくりくる言葉〉を選ぶ行為と「意味空間」の関わりについても検討する。

2. 先行研究

翻訳研究 Translation Studies では、古くから直訳 literal translation と意訳 free translation の対比によって議論されてきたが、Jakobson (1959/2004) や Nida (1964, 1969) をきっかけに、翻訳における意味 meaning の等価 equivalence を基準に議論されるようになった (Munday, 2016: 59)。

2.1 Jakobson

Jakobson (1959/2004: 114) は翻訳を (1) 言語内翻訳 *rewording*[7]、(2) 言語間翻訳 *translation proper*、(3) 記号間翻訳 *transmutation*[8]の 3 つに分類し、言語間翻訳について次のように述べた。

---

[6] これは (3) の手続きを踏んでいない翻訳を翻訳の範疇として含めないという意味ではなく、小説の翻訳において目指すべき翻訳のことである。

[7] 「言語内翻訳、すなわち言い換え[rewording]は、言語記号を同一言語の別の記号によって解釈する」(Jakobson, 1959:114 桑野訳: 247 強調は訳者による)

[8] 「記号間翻訳、すなわち変換[transmutation]――は、言語記号を非言語的記号体系の記号によって解釈する。」(Jakobson, 1959:114 桑野訳: 247 強調は訳者による)

(5) 同様に、言語間翻訳のレベルでも、コード構成単位間に完全な等価性は通常ないものの、メッセージが、外国語のコード構成単位やメッセージの適切な解釈として役立ちうる。[…] しかしながら、もっとも多く見られるのは、ある言語から別の言語へ翻訳する際に、ある言語のメッセージを、別の言語の個々のコード構成単位に置きかえるのではなく、メッセージ全体に置きかえるようなケースである。このような翻訳は、一種の伝達話法である。すなわち、訳者は、別の情報源から得たメッセージをコード変換して伝えている。したがって、翻訳は、二つの異なったコードによる二つの等価のメッセージを含んでいることになる。

(Jakobson, 1959:114 桑野訳: 248)

それまで「言語レベルの置き換え」に着目していた翻訳研究において、より大局的な意味の単位を持ち出した Jakobson の指摘は重要であった。また、Jakobson は「いかなる言語記号の意味も、別の、代わりの記号への翻訳であり、[…]「より詳しく説明されている」記号への翻訳なのである」 (Jakobson, 1959:114 桑野訳: 246) と指摘し、翻訳の不可能性について（音韻構造等の形式が意味と厳密に繋がっているような詩以外は）否定した (Jakobson, 1959/2004: 115) 。ただし、言語内翻訳においてすべての独身男性 bachelor が独身主義者 celibate であるとは限らないことと同様に、言語間翻訳においても完全な等価性はないと指摘した (Jakobson, 1959/2004: 114) 。語と語の対応より高次の単位である Jakobson の (5) における「メッセージ」が山本の「意味空間」に概ね相当すると考えられる。

2.2 Nida

聖書翻訳から着想を得た Nida (1964: 164) は、Jakobson が提唱した equivalence in meaning を「形式等価 formal equivalence」と「動的等価 dynamic equivalence」として発展させ、初期の理論[9]ではこの二つの要素の調和 effective blend を目指すべきであると主張した。のちに発表された Nida & Taber (1969) では、翻訳における目標を dynamic equivalence の獲得であるとした (p.1) 。

形式等価の翻訳とは、（起点テクストの構文やイディオムなどの）形式 form と（テーマやコンセプトなどの）内容 content を保持した翻訳である (Nida 1964: 159) 。典型例はグロス翻訳で、起点テクストへの理解（原点の言語の好まれる言い回しや思考の順序・理論）を最大限にするために効果的であると説明している[10] (Nida. 1964: 159) 。動的等価の翻訳とは、目標テクストの言語と文化に適合している訳である。表現が目標言語として自然で、目標テクストの読者が訳文の言語・文化のコンテクストで理解できる翻訳である (Nida 1964: 159) 。

---

[9] Nida の「等価」に関する用語は年代と共に変化した。Nida (1964) では formal equivalence と dynamic equivalence、Nida & Taber (1969) では formal correspondence と dynamic equivalence、Waard & Nida (1986) では functional equivalence という用語をそれぞれ用いている。用語を変更した理由として Waard & Nida (1986: 36) は以下のように述べている：“the term “dynamic” has been understood merely in terms of something which has impact and appeal”.

[10] ただし、このようなグロス翻訳をきちんと理解できるテクストにするためには膨大な注釈が必要であると Nida (1964:159) は補足している。

Nida (1964:164) は翻訳における必要事項を次のように提示している。“① making sense, ② conveying the spirit and manner of the original, ③ having a natural and easy form of expression, and ④ producing a similar response” (Nida 1964: 164) 。しかし、ここで問題になるのが、Nida が形式等価と動的等価を連続的なものとして捉えている点である。起点テクストと目標テクストの文化的・言語的差異が大きければ大きいほど、翻訳はむずかしくなる。日英翻訳に当てはめて考えてみると、Nida の「①意味を成す」を達成するには、ほとんどの場合語順を変えるなどの「③自然な言い回し」を実践しなければならず、①-④を連続的に捉える[11]ことが難しくなる。

また、動的等価は、起点テクストが読者に与える影響を目標テクストにおいて実現しなければならないと Nida は主張した。しかし、「読者の反応」を基準にテクスト間の「等価」を考えてしまうと、本来は様々な読者と解釈に対して開かれていた起点テクストの豊かさが翻訳では失われてしまいかねない。それは、多様な解釈可能性を内包する文学作品の価値を否定することに等しい。

このように、Nida の等価理論は日英翻訳にそのまま応用できないことや読者を単一的に捉えてしまう問題点がある。一方で、Nida の主張する読者の反応の等価とは、起点テクストと目標テクストが一つの「意味空間」を共有した場合に得られるものとして考えることで、Nida の理論の根幹は維持できると思われる。3 節では、「意味空間」の内実について検討する。

3. 「意味空間」と「作者の意図」

山本 (2020: 188) は翻訳という行為を「原作の作者が脳中に描き、伝えようとしている「世界」についての情報やアイデアに直接アクセスし、別の言語で再現する」ことであると述べている。ここで述べられている「世界」とは、「意味空間」のことである (山本 2020: 200) 。では、「意味空間」と「作者の意図」は同一視してもよいものなのだろうか。川端康成の『雪国』と Edward G. Seidensticker による英語訳との比較から、山本 (2020:177) が述べている「作者の頭の中にあった光景と、翻訳を読んで得られる光景」の一致について検討する。

(6) 石の多い川の音が円い甘さで聞こえて来るばかりだった。<u>杉の間</u>から向うの山襞の陰るのが見えた。 (川端 1948/2006: 33 下線は引用者による)

(7) Through the quiet, the sound of the rocky river came up to them with a rounded softness. Shadows were darkening in the mountain chasms on the other side of the valley, <u>framed in the cedar branches</u>. (Seidensticker, 1970/2011: 22 下線は引用者による)

[11] “① making sense” が形式等価、“④ producing a similar response” が動的等価に値する (Nida 1964: 164) 。

図 1. 「杉林の間」[12]

図 2. “framed in the cedar branches”[13]

(6) は『雪国』の語り手である島村と芸者の駒子が裏山の杉林の中にある神社で会話している場面の地の文である。起点テクストと目標テクストの下線部を比較すると、島村と駒子が見ていると想像される情景が起点テクストと目標テクストでそれぞれ異なることが分かる。日本の杉林として典型的に想像されるのは、図 1 のように間隔が狭いものである。図 1 のような杉林を想定した場合、「杉の間」とは複数の杉からなる無数の空間を指している。一方、(7) で複数形になっているのは branches であり、空間ではない。また、“framed”という表現から、杉の木とその枝が額縁のように景色を囲っている図 2 のような様子が目標テクストから想像される。また、図 2 のファイル名には “framed-by-trees-mountain-view” という、目標テクストと類似する表現が用いられていたことからも、翻訳者である Seidensticker は図 2 のような景色を想定しているものであると本稿では考えることとする。

この場合、図 1 と図 2 どちらが「原作の作者が脳中に描き、伝えようとしている「世界」」(山本 2020: 188) なのかをどのように判断するのか、という問いが生まれる。つまり、どちらが正

[12] Retrieved from: https://blog.goo.ne.jp/iwa-kikunoya/e/e2f5a0a148f0d03c9fd094d308bd8a89
[13] Retrieved from: http://www.forestwander.com/wp-content/original/2009_02/framed-by-trees-mountain-view.jpg

しい解釈なのかという問いである。そこで、起点テクストに提示されている情報を集めてみると、「杉林の陰」(川端 1948/2006: 30,33)「杉林の小暗い青」(川端 1948/2006: 31)「暗い葉が空を塞いでいる」(川端 1948/2006: 32) など、繰り返し「陰」に関する記述が見つかったことから、図 2 のような開けた景色は想像しにくい。加えて、東京に妻子がいる旅行者の島村と彼が懇意にしている芸者の駒子の複雑な男女関係にある二人の会話の舞台として、図 2 のような開けた景色よりも図 1 のように杉の木が密集したような景色が適していると思われる。以上の記述から、図 1 がより「筆者の頭にあった情景」に近いと推定する[14]。

このように、文中の記述を詳細に分析する文学研究に頼らなければ、どのような解釈が最も「筆者の頭にあった情景」に近いか知り得ない。つまり、山本 (2020: 192) が主張するように「ずばり翻訳研究は究極的には文学研究にして文体研究である」ということができる。また、山本 (2020:176) が「想像された「現実」との対応」と表現しているように、「作者の頭の中にあった光景」とはあくまでも「(翻訳者が想像する) 作者の頭の中にあった光景」であることが考えられる。

4. 「言葉を理解しているということの二つの側面」

古田 (2018) は、言語哲学の視点から「言葉を理解していること」には二つの側面があると指摘している。「他の言葉に置き換えられる」という側面と、「他のどんな言葉にも置き換えてもしっくりこない」という側面である。例えば、「せつない」という語彙の意味を理解していれば、それがどういう意味であるか尋ねられた時、「胸が締め付けられる気持ち」、「やるせない」、「しんみりする」、「かなしい」という意味であると説明できる (古田 2018: 89) 。古田の指摘するひとつ目側面、すなわち言葉が他の言葉に置き換え可能であるという側面は、Jakobson の言語的意味に関する記述と類似している。

(8) For us, both as linguists and an ordinary word-users, the meaning of any linguistic sign is its translation into some further, alternative sign, especially a sign "in which it is more fully developed," as Pierce[15], the deepest inquirer into the essence of signs, insistently stated.

(Jakobson, 1959/2004: 115)

同時に、「言葉の置き換え」はもとの言葉にあった表情やニュアンスを損なってしまう。例えば、夏目漱石の「吾輩は猫である」という有名な表現は、可愛らしい猫の印象に反して「吾輩」という尊大な一人称を使っていることに表現の面白さがある。この一人称を「僕」や「私」に置き換えた場合、多くの人は同じ印象を抱かないだろう。これは、「吾輩は猫である」という詩的で面白みのある表現が、言葉の置き換えによって損なわれてしまっているからである。詩的

[14] ただし、起点テクストから図 2 のような情景を想像する読者を否定するわけではない。
[15] Cf. John Dewey, "Peirce's Theory of Linguistic Signs, Thought, and Meaning," *The Journal of Philosophy,* XLIII (1946), 91.

な表現においては特にこの〈しっくりこない〉感覚が際立つという指摘も文学テクストの翻訳を考える上で重要である (古田 2018: 87) 。

このような〈しっくりこない〉感覚は、言語内翻訳 (言い換え) だけでなく、言語間翻訳でも生じる。例えば、「吾輩は猫である」を "I am a cat" に置き換えた場合、起点テクストにあった詩的作用が失われ、〈しっくりこない〉感覚が殊更際立ってしまう。このように、古田 (2018) が指摘する一見矛盾した「言葉を理解していること」の二つの側面は、翻訳における矛盾と葛藤を反映している。それは、あらゆる言語表現は翻訳可能である (Jakobson, 1959/2004: 115) という主張と、起点テクストと目標テクストが完全には等価になり得ない (Jakobson, 1959/2004: 114) という主張の間に生じる矛盾である。

また、起点言語で一つの語彙として表現されていたことを目標言語で複数の語の組み合わせによって表現することは、はたして「等価のメッセージ」を伝えていることになるのだろうか。例えば、Nida (1964:159) は形式等価の典型例としてグロス翻訳を挙げているが、適切に理解するためには膨大な注釈が必要であると補足している。野矢は「翻訳できるからといってわれわれもその概念をもっているとは言えない」と指摘している (2011/2020: 179) 。例えば、エスキモーやイヌイットの言葉で「アニユ」とは「飲料水用の雪」で「アウベック」とは「イグルーを作るために切り出した雪」(野矢 2011/2020: 178) だと説明することはできるが、このような概念を日本語で実際に使用することはないに等しい。このことから、野矢は「ある概念が一語で言い表せるのか、それとも長々とした表現でしか言えないのか、それは本質的な違いと言わねばならない」と主張している (2011/2020: 181) 。では、野矢 (2011) が指摘するような「本質的な違い」は、どのように翻訳され得るのだろうか。この問いについて、川端康成の『山の音』と Edward G. Seidensticker による英語訳の比較を通して検討する。

(9) 「加代がね、帰る二三日前だったかな。わたしが散歩に出る時、下駄をはこうとして、水虫かなと言うとね、加代が、おずれでございますね、と言ったもんだから、いいことを言うと、わたしはえらく感心したんだよ。その前の散歩の時の鼻緒ずれだがね、鼻緒ずれのずれに敬語のおをつけて、おずれと言った。気がきいて聞えて、感心したんだよ。ところが、今気がついてみると、緒ずれと言ったんだね。敬語のおじゃなくて、鼻緒のおなんだね。なにも感心することはありゃしない。加代のアクセントが変なんだ。アクセントにだまされたんだ。今ふっとそれに気がついた。」と信吾は話して、
「敬語の方のおずれを言ってみてくれないか。」
「おずれ。」
「鼻緒ずれの方は？」
「おずれ。」
「そう。やっぱりわたしの考えているのが正しい。加代のアクセントがまちがっている。」
[…]
「おずれでございます、と敬語のおをつけて言ったと思ったから、やさしく、きれいに聞

こえてね。玄関へわたしを送り出して、そこに坐ってね。鼻緒のおだと、今気がついてみると、なあんだというわけだが、さてその女中の名が思い出せない。[…]」

(川端康成 1954/2018: 6-7)

(10) "That Kayo – I think it must have been two or three days before she quit. When I went out for a walk I had a blister on my foot, and I said I thought I had picked up ringworm. "Footsore," she said. I liked that. It had a gentle, old-fashioned ring to it. I liked it very much. But now that I think about it I'm sure she said I had a boot sore. There was something wrong with the way she said it. Say "footsore".'

'Footsore.'

'And now say "boot sore".'

'Boot sore.'

'I thought so. Her accent was wrong.' […]

'It had a very pleasant sound to it, very gentle and elegant, when I thought she said "footsore". She was there in the hallway. And now it occurs to me what she really said, and I can't even think of her name. […]'

(Seidensticker, 1970/2011: 1-2)

(9) は『山の音』の冒頭部分で、父親の尾形信吾とその息子の修一の会話である。半年ほど尾形の家で女中をしていた加代が鼻緒ずれの「ずれ」に敬語の「お」をつけて表現したことに感心していた信吾だが、自分が「緒ずれ」と勘違いしていたことに気付き、がっかりしている様子が描かれている。〈信吾が勘違いをした〉ことは「敬語」と「鼻緒ずれ」の概念を知っていなければ理解できないが、英語には同様の概念が存在しない。そこで Seidensticker は "footsore" と "boot sore" という音が似ている二つの語に置き換えることで〈信吾が勘違いをした〉場面の作用を再現した。正確に言えば、作中に登場しているのは下駄でありブーツではない。しかし、例えば鼻緒を "clog thong"、ずれによる痛みを "sore" と置き換えた場合、「おずれ」と「緒ずれ」という同じ音のことばを信吾が聞き間違えた場面を読者に伝達することが難しくなってしまう。また、英語には「敬語」という概念がないため、 "it had a very pleasant sound to it" という説明を加えることによって再現している。このような表現の「等価」は、英語に存在しない概念である「敬語」と「鼻緒ずれ」を語彙の組み合わせによって置き換えて説明した場合は成り立たない。この例から分かる通り、「翻訳可能である」ことは必ずしも「等価である」ことを意味しないのである。

5. 言葉に宿る魂

山本は翻訳という行為を「作者が脳中に描き、伝えようとしている「世界」についての情報やアイデア」を「別の言語で再現する」ことであると定義している (山本 2020: 188) 。したが

って、「意味は言語に先行する」ことが公理であると主張している (山本 2020: 189) 。山本が定義する翻訳行為は、古田の〈しっくりくる言葉を選び取る〉行為として捉え直すことができる。私たちが日常の言語行為で伝えたい内容に適した言葉を探すように、翻訳者も起点テクストの作者の意図を伝達できる言葉を目標言語で探すのである。

この〈しっくりくる言葉を選び取る〉過程において、古田は重要な指摘をしている。それは、言葉そのものとは独立に、その言葉が持つ独自の表情やニュアンスが神秘的なものとして存在しているわけではないという点である (古田 2018: 114) 。〈言葉が喉まで出かかっている〉状態からぴったりな言葉が見つかると、もうその言葉以外ありえないような気持ちになる。しかし、この「ぴったりくる言葉」というのは、テストの模範回答のように最初から定まっていたわけではない。「ぴったりくる言葉」を探しているとき、私たちは既に念頭にある言葉をうっかり忘れてしまっているのではなく、ある文脈に適切な言葉を探り、たくさんの言葉の候補から「ぴったりくる言葉」の存在に「気付く」のである (古田 2018: 114) 。

また、古田は、言葉が他の言葉と置き換えできない固有性を持つことは、その言葉が「どの文脈も横断して、実体として魂が超然と存在するわけではない」(古田 2018: 118) と指摘している。これは、翻訳研究においても重要な指摘である。言葉が実体のある固有性を有しているものだと考えてしまうと、山本が批判したような「語に語が (用法まで含めて) 対応し、それによって、異なる言語でも同じ意味が生み出されるという素朴な言語観」(山本 2020: 102-103) に基づいた翻訳に陥りやすい。このような言語観は、起点言語の言葉の固有性を語順や用法等の「形式」を維持することによって再現しようとする試みであると言い換えることができる。しかし、起点言語の言葉が持つ表情やニュアンスは、言語内翻訳 (言い換え) の例からも分かる通り、語と語の置き換えでは表現することができない。つまり、山本の「意味は言語に先行する」(山本 2020: 189) という主張は、実体を持った言葉の固有性ではなく、伝達したい内容や文脈のことである。また、実際の翻訳作品を比較してみると、〈しっくりくる〉感覚が多様であり、個人差があることが分かる。

(11) 「金持ちなんて・みんな・糞食らえさ。」
鼠はカウンターに両手をついたまま僕に向かって憂鬱そうにどなった。
[…]
「ダニさ。」鼠そう言っておぞましそうに首を振った。
「奴らになんて何もできやしない。金持ち面をしてる奴らを見るとね、虫酸が走る。」
(村上春樹 1979/2004: 16 強調は作者による)

(12) “They give me the creeps!”
The Rat turned to me and bellowed gloomily, both hands pressed on the counter.
[…]
“Lice, that’s what they are!” The Rat shook his head vehemently. “Nothing but deadbeats the lot

of them! Gives me the creeps just looking at their money-bag faces!"

(Alfred Birnbaum 1987: 12)

(13) "Eat shit, you rich bastards!" the Rat shouted, glowering at me, with his hands resting on the bar. […]

"Leeches!" the Rat spat out, shaking his head. "The bastards can't do a damn thing for themselves. Looking at their faces makes me want to puke."

(Ted Goossen 2015: 8)

(11) は村上春樹の『風の歌を聴け』における一場面である。(12) は英語学習者向けに日本で出版された英訳であり、(13) はアメリカで出版された英訳である。(11) で引用された場面では、語り手の「僕」とその友人である「鼠」がジェイズ・バーで飲んで酔っ払っている場面である。鼠は金持ちをひどく嫌っており、金持ちをダニに例えて嫌悪感を表現している。(12) は「虫酸が走る」を "They give me the creeps!" と訳し、(13) は "makes me want to puke" と訳している。「虫酸が走る」を国語辞典で引いてみると、「吐き気がするほど不快でたまらない」という記述がある。つまり、(13) は辞書に記述されているような不快感を表現しているように思える。一方で、「虫酸が走る」と聞いたときに (少なくても本稿の筆者が) 実際に感じる感覚は吐き気ではなく (12) で表現されているような背中を這う不快感である。物語の文脈から考えてみると、(12) の "creep" は金持ちをダニに喩えた文脈を連想させ、(13) の "puke" は「僕」と鼠が初めて出会った場面 (酔っ払いすぎて二人をのせた車ごと公園に突っ込んだが、鼠がピザを吐くだけで済んだ) などが連想される。このように、文学作品の翻訳においては「虫酸が走る」という表現そのものだけでなく、小説そのものを文脈して捉えた際にどのような感覚が〈しっくりくる〉のかを検討する必要がある。

6. おわりに

本稿では、日英翻訳における「意味空間」の内実とその有用性について検討した。多くの翻訳理論が欧米文化圏を中心としていることもあり、日英翻訳にそのまま適応できないという問題点があった。「意味空間」を想定することにより、翻訳において意味と形式どちらを再現するのかという二元論的な対立ではなく、起点テクストが持つ (文脈や詩的な表現等によって定まる) 意味作用を目標言語で再現するという行為として翻訳を位置付けた。

参考文献

Fitzgerald, F. (2011). *The Great Gatsby* (p. 3). New York: Wordsworth Editions. (Original work published 1925).

Jakobson, R. (1959/2012). On linguistic aspect of translation. In Venuti, L. (Ed.), *The translation studies reader* (2nd ed.) (pp. 113-118). New York: Routledge. (邦訳：桑野隆 (訳)「翻訳の言語学的

側面について」ロマン・ヤコブソン 桑野隆・朝妻恵理子(編訳) (2015)『ヤコブソン・セレクション』.平凡社)

Kawabata, Y. (2011). *Snow country* (E. Seidensticker, Trans.). London: Penguin Group. (Original work published 1956).

Kawabata, Y. (1970/2011). *The sound of the mountain* (E. Seidensticker, Trans.). London: Penguin Group. (Original work published 1954).

Munday, J. (2016). *Introducing translation studies* (4th ed.). London: Routledge.

Murakami, H. (1987). *Hear the wind sing* (A. Birnbaum, Trans.). Japan: Kodansha International. (Original work published 1979).

Murakami, H. (2015). *Hear the wind sing* (T. Goossen, Trans.). United States of America: Vintage Books. (Original work published 1979).

Nida, E. A. (1964). *Toward a science of translating*. Brill.

Nida, E. A. and C. R. Taber (1969). *The theory and practice of translation*, Leiden: E. J. Brill.

Waard, J., & Nida, E. (1986). *From one language to another*. New York: United Bible Societies.

川端康成 (1948/2006). 『雪国』新潮社.

川端康成 (1954/2018). 『山の音』新潮社.

古田徹也 (2018). 『言葉の魂の哲学』講談社.

村上春樹 (1979/2004). 『風の歌を聴け』講談社.

山本史郎 (2020). 『翻訳の授業：東京大学最終講義』朝日新聞出版.

An Analysis of *Imi-kukan* in Translation Studies

Ikebe, Sara
ikebe-sara713@g.ecc.u-tokyo.ac.

Keywords: Translation Studies, *Imi-kukan*, equivalence, trying to find the right words

Abstract

Yamamoto (2016) criticizes the continuous debate of whether translations should be literal (word-for-word) or free (sense-for-sense). Instead, he introduces a concept of "*Imi-kukan*" where the translator attempts to reconstruct the world that the author had in their mind through its translation. This paper will examine the concept of "*Imi-kukan*" through comparing it with the equivalence theory of Jakobson (1959/2004) and Nida (1964, 1969). Further, it will discuss the relevance to Furuta's (2018) discussion on "the act of trying to find the right words". By adopting the idea of "*Imi-kukan*", the process of translation can be considered as a universal act of articulating what the text means.

（いけべ・さら　東京大学大学院）